と、イギリス國旗をあげるが、退廳するとすぐ引降してしまふ。其れ程な意氣をもつてゐる、人口は全部で十萬、世界で第三番目に大きいこの島は（第一はグリーンランド、第二はニュージランドでボルネオ全島は本州の二倍弱）蘭領ボルネオを除くイギリス勢力圏の、之の方面では全部で八十萬くらゐの人が住んでゐるにすぎない。しかもサラワクなどから出る石油の量は、實に大きなものである、日本人の多いタワオは小さな農園町だが、すばらしい邦人經營のゴム園が數マイルに亘つて開け、日本人小學校もあつて土人は心から日本人に信頼を寄せてゐる。

5　セレベス島メナド港

セレベス島メナド港附近の住民は、祖先は日本人だと信じ切つてゐる。其れだけに親日的であるが、而し人情風俗は、全々オランダ化し、少しも日本風は見えない、よく親しむと、何もかも打ち明けて語る所に、多少のなつかしみがある。セレベスで一番人口密度の多いのはメナド地方で、メナドは人口約三萬、セレベスの北端メナド州の州廳所在地、背後に豐饒な農業地をひかへた、重要な貿易港である、住民はメナハサ人とよばれこの土地は蘭印中でも一番教育程度が高く、文化的にも進んでゐる、キリスト教徒が多く、下女などでも日曜日には立派な洋裝にハイヒールといふ支度で教會へ出かける。從つて文化程度も高く、蘭印の兵隊には多くこのメナハサ人が採用されてゐる。色は比較的白く容貌は日本人そつくり、非常に親日的である。

自分たちの祖先は日本人だと本當に信じこんでゐる、ルソンに流された、キリシタン大名高山右近の一族が、こゝに流れて來たんではないかとさへ考へられる、日本人はメナハサ一帶に約三百人ぐらゐ住んで、主として商業貿易や漁業に從事し、わが領事館もある、メナドのすぐ後にはカラバツト火山が、秀麗な裳をひき、邦人はメナド富士とよんでゐる。

6　タラカン島

タラカンは、全島石油である、所謂火の島である。且つて小林一三使節が、玆の島の石油を多量に、買取りに行つたが、失敗に期した怨みの島である。皇軍の敵前上陸に依り、直ちに占

領されたのは痛快である。タラカン島はセサヤツプ河口にある長さ廿三キロ幅十五キロ位の小島である。石油の産額は近年約八十萬トンといはれてゐる。英國のバターフセ石油會社が經營に當り、油質は重質油と呼ばれ、ガソリン分は含まないが、其まゝで優良な燃料油として、またディーゼル油として使用される。わが艦艇をはじめ船舶の燃料油は、主としてこのタラカン島から購入されてゐた。

島の唯一の港であるタラカン港は、島の南端に近く、港は海底の浚渫が行き屆いてゐるので一萬トン級の油槽船も樂に出入が出來、客船なら二萬トン級の船舶も入港する事が出來る。港の北岸にある丘陵に貯油槽が並んでゐて、棧橋までパイプで油を送り、栓を開けば自然流下によつて、石油を油槽船に積み込み、一回二千トンくらゐの積込み能力を持つてゐる。

油田に働いてゐるのは、少數の蘭人技師を除いては、住民と支那人で、タラカン港以外に、小さな部落が二つあり、他は樹木が密生してゐて住民も居らず、全く石油だけの島といつても過言ではない。この島にも請負業と雜貨商を營んでゐた北村新吉さん外五、六名の日本人が進出してゐた。

當地の警戒は嚴重を極めタラカン港沖約十四マイルに、燈船があつて水先案内が乘り込んで來る。暫くすると海軍の敎導船が、姿を現して誘導し、機雷原を避けて大きく迂回して、やつと入港が出來るやうな有樣であつた。タラカン島を含む北東ボルネオ油田地域は、最も開拓の遲れたところである。人口も稀薄な地方で、交通の便も惡く、わづかにスラバヤを起點とし、タラカン島を終點とする沿岸巡航定期船が、一週間に一度づゝ發着するのと二週間に、一度タワオ間を連絡するのが、ボルネオ島内各地と他の島々を結ぶ交通機關であつた。

これがいよ／＼日本人の手で開拓されることになるのだから愉快である。

7　ボルネオ島パリツクパパン

一月廿四日未明、我が陸海軍部隊は、蘭領ボルネオ島の要街、パリツクパパンに敵前上陸を敢行した。この上陸に依つてボルネオ東海岸は、全く制壓され、濠洲を深刻に脅威することゝなつた。

パリツクパパンは、ボルネオ東海岸唯一の良港であり、且つ石油の港である。ボルネオの南海岸線は、ジヤングル地帶で海の中までマングローブ樹が生ひ茂つてゐる、干潮になると一マイルも二マイルもどろ〳〵の濕地々帶になる處が多い。

その中でたゞ一つパリツクパパンは小さな河口が灣をなすボルネオ隨一の良港である、港の入口は淺いが灣内は深く大型の汽船は潮待ちをしてから入港する、港は五、六千トンの汽船が四、五隻は横付けになる相當立派な棧橋がある。英國のバターフセ石油會社の根據地で、スラバヤから船が一週一回寄港し、人口三萬、その大部分は石油會社に關係し、日本人も約百名ゐる、同市は文字通り「石油の町」で市内には大精油工場櫛比し、原油はサンガサンガの採油地からパリツクパパンまで數百キロの導管で輸送される、同市で精油の上、こゝから輸出してゐる、一九三八年度の石油生産高百七十萬トン、同年度の輸出額は四千六百十六地盾に達してゐると言はれる。

なほこの地は當局陸海軍の守備嚴重で、砲臺、空軍の設備も施され、守備隊が駐在し陸上、水上の强力な飛行基地があり一般交通上より見るも、タラカンよりスラバヤに通ずる定期航空機は發着し、タラカンと共にボルネオにおける、一大要衝をなすものである。

住民は英蘭人の石油事業が始まつてから移住してきた支那人、印度人、ジヤバ人で、土着の住民がゐない爲、固有の文化も風俗もなく、娯樂機關も四、五年前に映畫館が一つできた位のものである。

街を離れると殆どジヤングル地帶、山奥には未開のダイヤ族がゐる、産業は石油以外に多少の木材を輸出するだけ、食糧品も總てジヤバから輸入してゐる。

交通機關としては、街から一里ほど離れた製油所まで電車があるが、英蘭人と東洋人の乘る席は嚴重に區別されてゐた、石油關係以外の人は乘車御斷り、邦人は戰前まで約五十名ほど在留してゐたが、その中でも雜貨商雪本商店の活躍はパリツクパパン石油關係の外人間にも尊敬されるほど有名なものであつた。

8　濠洲委任統治領地方

ニューブリイテン島ラバウル

ニューアイルランド島カビエング

一月廿三日未明、我が陸海軍部隊は、濠洲委任統治領たる、ニューギニア島の東方、ニューブリテイン島ラバウル附近の敵前上陸を敢行、又別隊は、ニューアイルランド島カビエングに敵前上陸し、米國と濠洲連絡の切斷に成功した。

ラバウルはニューブリテイン島の東北端にある政治、經濟、文化の中心地で、最近まで濠洲委任統治領ニューギニアの首府であつた。

ニューブリテイン島は、幅約五十マイル、長さ三百マイル、原始林に蔽はれ、島内には火山が噴出、ラバウル市の附近にも小火山群がある、同市の臨んでゐる、シムプソン灣は、火口だといはれ天然の良港である。ニューブリテインの住民は、墨よりも黑い皮膚を持つたブカ族、淡褐色のパプオメラネシア族、そこへポリネシア、ミクロネシア族まで混血してまた白人との混血も多く、宛ら人種展覽會場の觀がある。

文化程度は極めて低く男は赤や黃色の腰卷をし、裝飾のために髮の毛を漂白して、淡褐色や白にしてゐるものもある。住民は從順で自動車の運轉手、料理人、ホテルのボーイなどになつてゐる。少し奥地に行けば腰卷は木の葉にかはりアダム、イヴの姿を想はせる原始的な恰好をしてゐる。これなどはまだ良い方で、ラバウルのずつと奥地になると、人間が生れた時の姿の儘、全裸體の男女が飛び出して來る寔に吃驚ものである。

頭髮をオキシフルで漂白して赤白い毛にして得意然と構へてゐるが、このオキシフルがみな日本製品だ、何時頃から覺えたのか住民は、蹴球が大好きで、日曜日になるとグラウンドに集つて、蹴球に打ち興じてゐる。

市街の大半がラバウル植物園で、市街そのものが一つの公園の感がある、衞生には特に力を注ぎ熱帶都市として實に理想的である、ラバウル飛行場は市の郊外にあつて、ケリート灣に面し當時は十人乘機が毎週一回シドニーに至る定期航空路に就航してゐた。

女は非常に勤勉で毎朝開かれる青物市場に、蔬菜やバナナ、パパイヤなどを頭にのせた籠に入れて持つて來るが、賣れなければ投賣りもせず、又頭にのせて持つて歸る。

市場で彼女達が賣つた、青物や果物の代りに持つて行くものは、カリフオルニア製のロープ煙草で、貨幣は一切使用されない。この煙草は黑蜜に漬けた繩狀の嚙み煙草で、一本三十五錢位に當り、住民達はこれを非常に愛好してゐる。

ラバウルとともに皇軍が敵前上陸に成功した、ニューアイルランド島とその首都カビエングは、ニューアイルランド島北東端ステフイン海峽に面したカビエング灣にぽつんとある町である。市廳所在地で、濠洲人百人、支那人五十人、カナカ族二千名、コプラの集散地である、ラバウルも然うだが、玆所もまた飲料水は天水で、果物はバナナ、マンゴーがあるだけ、郊外東南部突端にあるココ椰子園は、長濱太市氏の租借農園で唯一の寶庫である、住民はラバウル付近の住民より文化程度が低い。

ニューアイルランド島はビスマルク群島中の一つで、ニューブリテイン島の北方に在る、ニューブリテイン島と、ちやうど直角をなしてゐる、長さ二百哩、幅平均二十哩ぐらゐの細長い島で海岸線に屈曲が少くて良港は少く、僅かに今度敵前上陸したカビエングとナマタナイぐらゐのもの、山の多い島だが海岸線はほとんど開發され、大部分が椰子農園である。

9　ニューギニヤ島地方

赤道下に、食人國と宣傳され、不死鳥の如く、怪奇な姿を横たへてゐる、ニューギニヤ島は、面積實に七十四萬平方キロ、卽ち我が全土よりも廣い。而かも全島は密林と、怪奇な蠻習に閉ざされ、謎の島である。

人口は僅に三十數萬、此の中歐人は三百數十名、一平方キロの密度が〇・八人といふ全くの無人の境として放置された。蘭英兩政府が自國の手が廻り兼ね、未開の天地を食人國として宣傳他國人の注意を向けさせないやうにした爲である、オランダ人が初めてこの地に足跡を印したのは西暦一六一六年、それから百五十年後に正式に占有したが、それも名のみで一八九八年まで、島内には一人のオランダ官吏も居らず、オランダがこの地に關心を持ち始めたのは、今世

紀に入つてからである。

地勢は大陸的で、山は高く野は廣い、最も高いカルステンツ連峰は、五千メートルを超え、赤道の近くにありながら白銀の峰を聳えさせてゐる、海岸に平野が開け、中央山脈以南の、アラフラ海に臨む大平原は、人跡未踏のジヤングルが深く河も多い、海岸線は屈曲が多く島嶼に惠まれてゐる。

ニューギニヤの住民を代表するものはパプア人である。パプア人は體格強大といふので有名であるが、その中には平均身長一四四センチに過ぎぬ矮人族も混つてをる、腕筋肉が逞しいのに比べ、脛が細く弱いのは舟ばかりで往來するためである。全體に原始民族が多く、幾多の奇習を持つてゐる。中でも、首狩りなどは南海岸地方に多い、首狩りは子供に名をつけるためにやるので、男の子が生れると、手あたり次第に山野を探し廻つて、老若男女の別なくこれを打倒し、その名を聞いた上で、その首を刎ねる、犧牲者の名が新しい子供の名前になるのである。結婚にも奇習があつて、普通は賣買結婚だが、掠奪結婚もしばしば行はれる、妻を買ふ貨幣は小さな貝殼で、これを數珠のやうに二米ほどつなぐ、それで一婦を購ふに十分だ、妻を求めるときはその貝殼を持つて旅に出る、途中で氣に入つたのに出會ふと、忽ち女を捕へて乳を掴む、女は泣き叫んで家に歸るが、一度男に乳を掴まれるとすでに結婚を意味するので、後刻男は貝殼を持つて、女の家を訪れ易々と女を手に入れるのである。

一般に多妻主義で族長の勢力が強い、男廿人、女十三人の或る村では、村長が自ら四人の妻を娶つたため、殘る十九人の男が九人の女を、分けどりしなければならなかつた例もある、大抵の部落では、男子は男舍、女子は女舍と別々に群居してゐて、家庭といふものはない。子供が生れると臍の緒を種族固有の方法で切るから、外來者などには、臍を示して種族の由緒を明かにする、挨拶かはりに臍を出すのだ。煙草は子供までふかしてをり、酒はサゴ酒などがあつて、全村擧げて醉拂つてゐるところもある。宗教は種族固有の神秘な原始教が多く殘つてをり、お互ひにお伽噺のやうな奇習を誇つてゐる。

ニューギニヤの生物は、一般に濠洲とよく似てゐる。蜥蜴、鰐、魚龜、アラン草、サゴ林、

ユーカリ林、エリカ蘭などが特産とされてゐる、この廣大な天地が明るみに出たら、どんな資源が飛び出すか。産業は豐富な林産の外タピオカ、米、コーヒー、煙草、玉蜀黍の栽培が可能である。金、銀、銅、鐵、亞鉛、雲母、朱砂、オスミリデアム、マンガン、黑鉛の埋藏は確實金鑛、石炭、石油も諸所に探鑛され、わが大東亞共榮圏の一翼として、この不死鳥が一躍、覺醒し大飛躍をなすの日も遠くはあるまい。

10　ハルマヘラ群島地方

南洋の大目王と呼ばれ、我が國には極く親しみの多いハルマヘラ群島は、其の割合に日本人に知られてゐない。之の國の王様は、日本酒が大好物と、言ふだけに、それだけ親日的である。ハルマヘラは我が國の四國より僅かに小さく、テルナテ島は自動車で、三時間位で一周出來る、在留邦人は卅四、五人、テルナテの街は人口一千五百、オランダ人は卅人位しかゐない、こゝに知事が常駐し、ハルマヘラ群島とモルツカ群島を統治し郊外の城にはサルタン（王）が住んでゐた。現在のサルタンは卅七か八でオランダの大學を出てゐるが、なか〳〵親日家である。海苔と日本酒が大好物で、是非東京が見たいと言つてゐる程である。

先王は遠くニューギニヤまで征服した英傑で、オランダのため永く幽閉されたのち、先年なくなつた。それだけに住民の間で、非常な勢力がある。住民達はオランダ知事の前では平氣でも、王の前では必ず履物をぬぎ、裸足になつて土下座をする。

珍しいのは住民の結婚である。結婚の當日となると、花婿の村から女ども大勢花嫁の家に押しかけ、花嫁を奪はうとする。すると花嫁は泣いて兩親にすがりつく、そこで親、嫁を中に挾んで、爭ふのである、それで奪ひ得ないと、花婿方では二度も三度も、人數を增して押し寄せる。

最後に花嫁を奪ひ意氣揚々と引揚げて行く樣は確に奇景である。花婿はその日から突然何れへか雲隱れし、一週間ばかりは姿を見せない、その間は花嫁を中にして、酒宴が續くだけである、さうして花婿が現はれると、今度は花嫁が酒宴に出た人々の家の前を、一々掃除して廻る自分はこれだけ働きがあるといふことを見せるためである。

動物で珍しいものは、野生の豚と野生の鷄がゐる。サゴ椰子を切つて、倒しておくと油蟲の

やうな蟲がわく、これは住民の大好物でもあり、また山豚の大好物でもある。山豚が鼻をクンクンいはせながら、やつて來たところを、弓で射殺するので實に痛快である。野鶏は丁度内地のチヤボくらゐの大きさだが、卵がとても大きく、數羽共同で土の中に產むのである、住民の食物中アルコール飲料は、サゴ椰子の酒で、サゴ椰子の花の柄を一日、一、二回づつ一週間ほど叩いておいて、朝早くその柄を切つて、竹の筒でうけておくと汁がたまり、この汁を朝の中にとれば、非常に甘く煮つめると黑砂糖になる、而してそれを夕方まで放置すると、味のよい酒になり、更に十日も放つておくと、立派な酢になるといふ重寶なものである。

11　アンボン島地方

一月三十一日未明、我が陸海軍部隊は、バンダ海の要衝、アンボン島附近に敵前上陸を敢行した。アンボン島は、セレベス島とビスマルク群島との中間にある。

即ちセラム群島のアンボン島は蘭印にとつてスラバヤにつぐ、重要海軍空軍基地であつた。最近では濠洲軍および米軍がこゝを基地として利用してゐた、敵はこのアンボン島を基地として比島、ボルネオその他日本軍占領下の各地を爆擊し、さらに適當な前進基地を見出して、あはよくば日本本土空襲を行はんと野望を逞しうしてゐたが、わが奇襲上陸により、この企圖は紛碎されたばかりでなく、逆に蘭印自身および濠洲破滅の飛石となつたのも痛快である。

アンボンはモルツカ群島のアンボン島にある、モルツカ州の首都、人口約一萬七千、ニュージーランド、フイリツピン間の定期船の寄航地、またスラバヤ、マヌクワリ間の定期航空機の便あり、無線通信の施設もある、交通上重要な地點で港の北岸に軍用飛行場、その西南方に民間着陸場があり、スラバヤより海軍航空隊の一部が移駐してゐた、アンボン附近に住むアンボン族は、文化の程度も比較的高く、性質は溫和かつ勇敢である。蘭、西、葡人の混血が多くキリスト教信奉者が多い。アンボン附近はバンダ海の要衝として鐵條網數線を設けた陣地があり、相當堅固な防備を施してゐた、皇軍の敵前上陸成功によりさきのケンダリー（蘭領セレベス島東岸）の占領とともにバンダ海制壓への重要意義を有するものである。

一月廿七日蘭領ボルネオ方面北端の要衝パマンカツトの奇襲敵前上陸に成功し、同時に相呼應して、英領ボルネオのクチンにあつた皇軍別働隊は、國境を突破し、南方に進みシルアスを攻略し、レド飛行場を占領した。タラカン島に次いでパリツクパパン上陸部隊は、海上舟艇機動により奇襲上陸を敢行したものである。

この作戰はさきに、マレー半島西岸南下部隊の行つた、舟艇機動作戰が、皇軍のシンガポールへの進擊速度を著しく早めたと同樣の意義を有するもので、英領ボルネオのクチンから標高二千メートルの峻嶮な、熱帶の山岳地帶を突破し、レド飛行場を占領した部隊の殊勳とともに大に稱揚すべきである、さきに皇軍の確保せる蘭領タラカン島並に、パリツクパパンの兩地と共に、この西北部要衝の攻略は全蘭領ボルネオをわが制壓下に入らしめたのである。

パマンカツト、シユカリンは、いづれも蘭領ボルネオ西部要衝で、軍事的にも交易的にも重要地位を占めてゐる、海上五百キロを隔てゝシンガポールに對してゐる。パマンカツト及びサンバスは蘭領ボルネオ西北部の要港、人口約三萬、港灣施設は貧弱であるが、大型汽船も優に出入し得るほどの水深があり、背後にある西ボルネオ第二の都市サンバスの、外港として、サンバス同市集散の金、ゴム、コプラ、ロタン等を輸出してゐる、サンバスには早くから軍用飛行場が設けられ、大東亞戰勃發以來パマンカツトにも軍事施設が施された、蘭領ボルネオ西部防衛の一中心地となつてゐた、住民の大部分を占める華僑が殆ど商權を獨占し、オランダ人は極く少數、サンバス郊外に宏壯な邸宅を構へてゐる、パマンカツトとゝもに西北ボルネオの天然の良港で人口三萬、西ボルネオ第三の都會である。

13　ジヤバ島敵前上陸

蘭印の死命を制した、ジヤバ島敵前上陸は、開戰以來、最初の

「大海戰の伴つた敵前上陸」

であつた。即ち敵聯合軍は、我がジヤバ島敵前上陸の輸送船團を襲ふべく、所在全艦隊を以つて强擊した。而し既に之れあるに備へた我が艦隊は、物の見事に之れを擊破し、豫期通り敵前上陸は成功した。

ジャバ島敵前上陸は、從來の敵前上陸と異り、掩護射擊が大海戰であるだけ、强襲中の强襲敵前上陸である。

第五章　敵前上陸の將來と結論

第一節　米本土の敵前上陸

大東亞戰爭は、卽ち世界戰爭である。大東亞が我が武威に慴伏し、共榮圈が確立して東亞の平和が獲得されても、世界が立てなほり、世界平和が來らねば、大東亞戰爭は終結を告げないのである。眞に世界が立て直り、眞に世界平和を招來するには、米、英兩國を完全に降伏させねばならぬ、米英を完全に降伏さす爲には、英國作戰に於ては、盟邦獨逸、伊太利が協調し、英本土敵前上陸ともなるであらう、又米本土に對しては、我が軍單獨、或は盟邦と協調して、米本土敵前上陸を敢行、城下の盟ひをなさしめねば、世界大戰爭の終結を見る事が出來ないで

あらう。

英本土敵前上陸は、さておき、米本土敵前上陸が、果して可能であるか、否かは、頗る興味ある問題であり、又最も大切なる問題である。

と言ふのである。

之れは一般國民も、考へてゐる處であるが、果して米本土を叩きのめす事が、可能であらうか、其れが問題である。

然し問題は簡單である。即ち米本土に敵前上陸が、可能であれば、勇猛なる我が陸海軍が、米本土を席捲するは容易である。若し米本土に敵前上陸が不可能なれば、米本土を慴伏さす事は困難である。何故なれば、たとへ米本土を包圍するも米本土は、南北兩米を以つて、自供自足し、或る程度持ちこたへる可能性があるからである。即ち英國に對し、印度を封鎖するが如き、效果は見られない恐れがあるからである。

第二節　米本土敵前上陸の方法と戰果

今次歐洲大戰に於て、獨逸軍が諸威の、敵前上陸に成功し、海軍戰史上、未曾有の偉勳と讃へられた。歐洲では然うであらうが日本軍はこんな事は、お茶漬け前である。

然し乍ら各國が、其の本土を守る力は、決して侮るべからざるものがある。英本土が頑強に、獨逸軍の敵前上陸を、彈ねつけてゐるは、よい例である。

米本土は、英國よりも、大海を控えてゐるだけに一層、有利な立場にある、然かも本土の面積は廣い。日本軍が敵前上陸するにしても、相當の軍力を要するは勿論である。

畜、米本土は、太平洋方面より日本軍、太西洋方面より獨伊軍が、襲ひかゝる弱味を持つてゐる。而して日本軍が、米本土に敵前上陸するに大要二つの方法がある。

一、は合衆國の正面玄關より上陸するもの

二、〇〇〇〇方面に上陸し、順次押して行く作戰。

何れかによらねばならぬ。精細は軍の機密に關するから省くとし、唯之れ丈けは言ひ得ると思ふ。

「即ち、合衆國、正面玄關よりの敵前上陸は、非常なる困難を伴ふが、〇〇〇〇方面の敵前上陸は、比較的容易であり、日本軍なれば決して不可能ではない」――と言ふ事である。

必竟、米本土の敵前上陸は可能であると言ふ事である。米本土敵前上陸が可能なれば、米本土の徹底的膺懲は、武力に依つて出來得る事となるのである。

……

米本土敵前上陸は、合衆國正面よりするにしろ、〇〇〇〇方面より敢行するにしろ、米國を徹底的に降伏さす爲である以上、大軍を派遣せねばならぬ。

從て多大の犧牲を拂はねばならぬは勿論であり、其れは當然覺悟の前であらねばならぬ、が、問題は、それ程大なる犧牲を拂ひ、大仕掛な行動をするだけの、戰果があるであらうかと

言ふ事である。

太平洋上に於ける武力戰に於て、聖戰の目的完遂を見ず、長期經濟戰に於て、尙且勝負決せざる場合、我が國の取るべき道は唯二つある。

即ち

1、蛇を半分殺しにしておくか。

2、徹底的に叩きのめすか。

である。　米本土敵前上陸は、其の（二）の場合即ち、徹底的に叩き潰す方法として取るのである。

然らば、其の犧牲對效果問題なぞは論外であらねばならぬ。

「如何なる犧牲を拂ひても、徹底的に叩き殺す」

のであり、又然した場合のみに行はるべきであり、犧牲對效果なぞの小乘的なる問題を超越し、唯一意米本土の息きの根をとめる丈けに、驀進する場合のみに、用ひられる方法である。

即ち、犧牲とか對戰果程度なぞの文字を離れ、徹底的に聖戰の最後目的を貫徹さす爲に、用ふる手段である。萬止むを得ざる時の手段であり、大乘的最後の手段である。

第三節　日本本土と敵前上陸

飜つて、日本本土に對し、敵軍が、果して敵前上陸を敢行し得るや否や、之れは餘計の事のやうであるが、然し考への中に入れておかねばならぬ事である。

或る外人の說だといふのに、

「日本本土へ敵前上陸するなれば、東海道の沿岸、清水港のあたりがよい」

と言つたさうだ、之れはこの近海は遠淺で、とても敵前上陸に適當な濱があるからだと言ふのであるが、又一說には、あの邊は風景もよく、日本の誇り富士山に近いから、一直線に富士山を占領してしまふ爲だと言ふ人もある。

敵前上陸を觀光と間違へてゐるやうな、空ら言は信じられないが、而かも馬鹿にならない意味もある。

勿論〇〇方面では、

「其れはペルリの幽靈でも言つたんだらう」

と一笑に付してゐるが、米英とて口惜しまぎれ、破ぶれかぶれに、どんな眞似をするかも知れない、どんな事をされても、微動だもしないだけの準備が肝要である。

然し敵前上陸專賣の、本家本元へ來たらば、それこそ飛んで火に入る夏の蟲は當然である。要するに日本本土は、先づ鐵壁であると考へてよからう。唯、敵飛行機の空中上陸は、止むを得ない事であり、又、それ位の事はあるべきと見て、周到なる要意と覺悟が必要である。

第四節　共榮圈内の敵前上陸

日本本土の敵前上陸は、前述の如く到底考へ及ばず、一片の空想に過ぎないのであるが、東亞共榮圈内に於ける、敵前上陸卽ち敵國に於て、逆襲し得るや否や、之れは餘程研究せねばならぬ問題である。

「思ふ存分、日本に取らせるだけ取らせておいて、後で、取り返してやる」

と、英國の一大官は放言してゐる。之れは一片の負け惜しみとのみ考る事は出來ない。全世界に日の沒する處なきまでに、喰ひ下り、執念强い英國の事である。

「幾百年かゝつても、何んとかして取り返してやる」

と言ふ怨言は、輕々には付されない。大東亞の盟主たる、日本國として大に味ひおくべき事である。

從つて戰爭繼續中は勿論、大東亞に平和が招來しても、決して油斷は出來ない。全世界の三分一を擔當する我が國は、之の廣域に亘り周到なる軍備工作を固めねばならぬ。

「功成りし曉は凋落の暮なり」

と言ふ、英米の轍を踏む事なく、益々兜の緒を締め、層一層戰備を整へ、

「蟻の這ひ上る隙」

なきまでに大東亞を守る事が肝要である、それと同時に、八紘一宇の大精神を以つて世界全人類の向上發啓に努力すべきである。

第五節　敵前上陸の結論

以上第五章に亘つて、敵前上陸の全貌を述べたのであるが、特に玆に其の結論を揭げ、非常時局、國民修錬の一助ともならば幸甚の至りである。

敵前上陸は屢述の如く、日本軍の華であると同時に、日本精神の精華であり、日本國の誇りである。

この敵前上陸は、之れを結論的に區別すると、

1、形から見たるもの

2、無形卽ち精神的より見たるもの

の、二大方面より穿鑿する事が出來る。依つて玆に此の二方面を結論的に論述して見たいと思ふ。

1　形から見たるもの

敵前上陸を、形から見たるものに、次の種別がある。

1、卽ち强襲敵前上陸と、奇襲敵前上陸である。强襲敵前上陸は敵前上陸の最も至難なる地點に强襲するもので、艦艇の掩護射擊、航空機の掩護射擊等を要する敵前上陸。

2、巧みに奇襲し、敵の抗戰輕微なる敵前上陸、從つて艦艇及び飛行機の掩護射擊等を要せざるもの

3　全く敵の抗戰なき敵前上陸

に三大別する事が出來る。

而して之れを結果より見る時は

1、上海の敵前上陸の如く、犧牲多き敵前上陸。

2、敵の抗戰力少く、犧牲が比較的尠き敵前上陸。

3、全く犧牲なき敵前上陸卽ち無血敵前上陸。

に三別する事が出來、尙之れを戰果より區別すれば、

1、犧牲多くとも、戰果多大なる敵前上陸
2、犧牲少く、戰果多大なる敵前上陸
3、全く犧牲なく、戰果多大なる敵前上陸

の三種別であり、苟くも日本軍の敵前上陸に於ては、戰果の尠くないものはない。之れは敵前上陸敢行に當り、周到なる準備と戰術及び用兵の妙が、もたらす賜であり、日本將兵の旺盛なる精神力の結晶であるからである。

2　精神力より見たもの

敵前上陸は、我が國民獨特の精神力に依るものであるは、屢說の通りであるが、之れを結論的に區別すると、

1、單なる敵前上陸の精神力
2、皇國の理想を顯彰する爲の敵前上陸精神

とに、二大別する事が出來ると思ふ。日本將兵が、如何に戰鬪力が强くとも、戰鬪其のものに、高き理想深き信念がなくては、眞底より大勇は出ないのである。西歐の敵前上陸がそれである。

今回の聖戰は、歐米の侵略桎梏より、東亞を解放せんとする、高き理念より生れたる人道最高の鴻德戰である。

即ち「神」になり代つて行ふ、救ひの戰であり祓ひの敵前上陸である。故に

「必ず爲す」
「必ず勝つ」

の信念が生じ、大勇が生れ、至難の敵前上陸も易々として成功し得るのである。この理想、この信念こそ、敵前上陸の根本をなす、大精神であり、即ち大東亞建設の根本精神でもあるのである。

故に吾等は、敵前上陸の信念を其の儘、今次聖戰の全體に至し、必勝の大信念を以つて、この長期戰に當らねばならぬ。

最後に、〇〇方面より發表されたる、必勝の大信念を錄して、本書の結びとなす。

「現今の戰爭は信念と信念の戰爭である、わが國民は今般の大東亞戰爭によつて、自分達の實力を見直し、その信念を高めたことと思ふ。これまではわが國朝野の間において、米英依存の思想が入つてゐたことは爭はれない、しかもその餘波は未だにあるかもしれない、もしあつたとすれば大東亞戰爭の遂行上甚だ遺憾とする。これは必竟必勝の信念に缺けてゐるがためである。しからば必勝の信念とは如何なるものであるかを國民は、先づ之れを知らなければならない。それには大東亞戰が如何にして行はれ、如何なる經過を辿るかをはつきりと知らしめ、これを徹底せしめて國民を指導する外はない。

何故大東亞戰爭最後の勝利が我方にあるか、獨伊の場合を考へるに、その作戰が如何なるものであるか知らないが、とにかくスエズ、ジブラルタルの陷落は早や時間の問題である。この敵國の生命線が樞軸側に陷るならば、そしてインド、濠洲が樞軸によつて、陷落せしめられる時は、英國の衰亡は最早決定的のものといはなければならない。かうなれば獨伊が英本土上陸を敢行しようがしまいがそれは問題外で、英國は完全に米國の屬國である。さうして英帝國の勢力を太平洋、大西洋から驅逐して樞軸國側の據點を確保、獨伊兩國と共に英國を屈服せしめるのである。而して今般の戰爭は中途講和といふやうな甘つたるい、いゝ加減なものでは決してない。帝國としてはあくまで敵國をして城下の盟をなさしめるまで攻擊の手はゆるめない。

今回の戰爭にあたり敵側に、これほど大きな弱點のあつたことは、あらゆる戰史においてもその例がない、それは米國の戰爭目的が全く自家撞着のもので外交上、軍事上珍しい位の誤算があつた。世間は米英が非常に強いものと思つてゐたかも知れないが、これを解剖すればおよそ右の如くである。かくて大東亞戰爭においては、あくまで勝利は當然我方のものである、これが即ち必勝の信念である。

必勝の信念は、即ち、米英國敵前上陸と同樣の意味をなすものである。

昭和十七年六月三十日初版印刷
昭和十七年七月廿日初版發行
版部 2000部

(停) 定價金壹圓參拾錢

出文協承認ア
號 120093

著者 林(ハヤシ) 直人(ナヲシド)

發行者 東京市神田區三崎町二ノ三八 田中拾吉

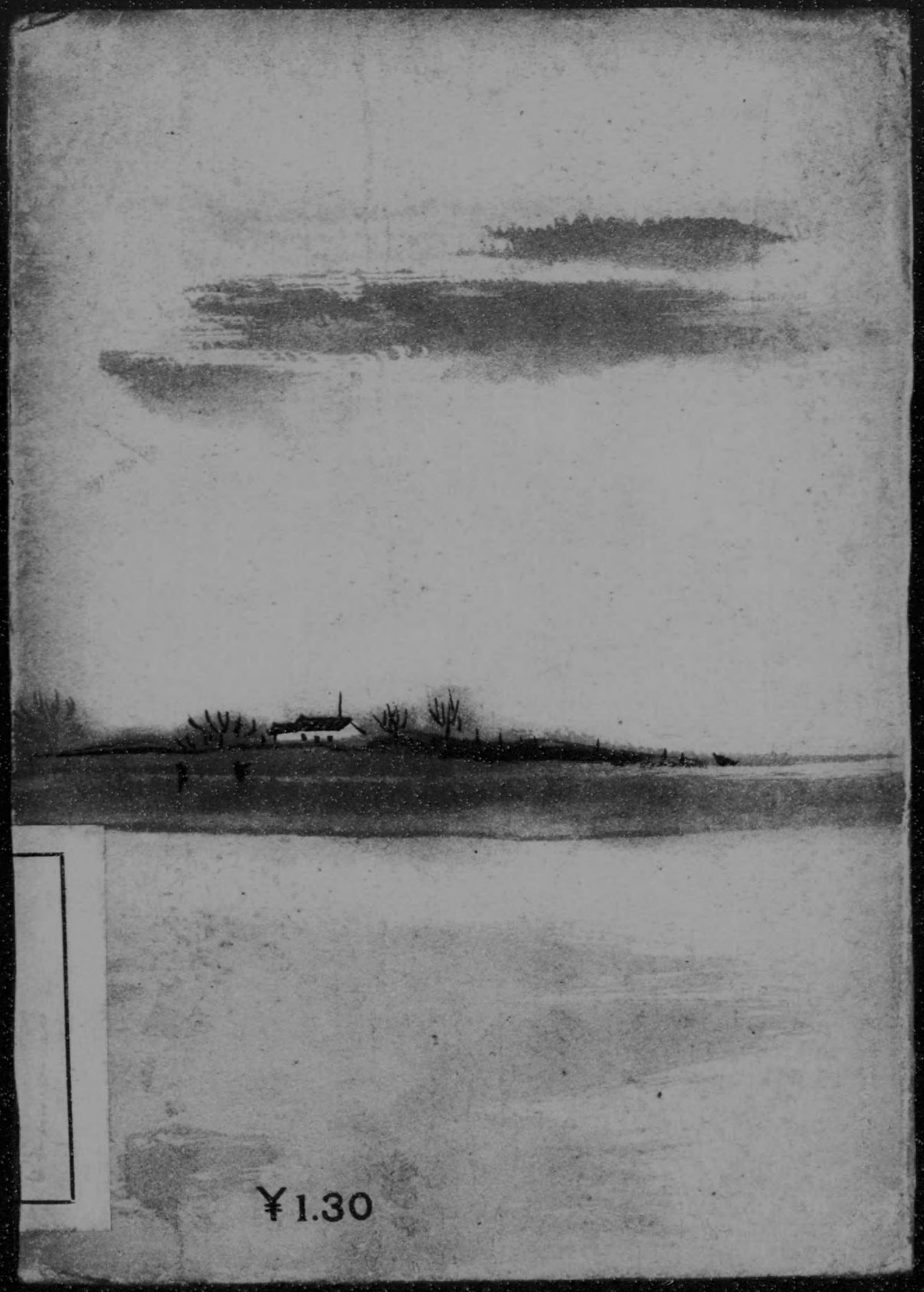
印刷所 東京市神田區西神田二丁目三番地 (東京四〇七八) 菊地新吾

發行所 東京市神田區三崎町二丁目三八番地 田中誠光堂
電話九段(33)二三二三番
振替東京九三三六〇番

(會員番號 116142)

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

932
73



¥1.30